

作

家の『三浦しをん』さんは、今年五月に『神去なあなあ日常』と題した小説を徳間書店から刊行しました。書籍の帯には「林業に《ゆる〜》かける青春！ 林業っておもしろ〜！」という言葉が踊っています。主人公である平野勇気は、家族や先生が「緑の雇用」制度に勝手に応募したことから、高校卒業と同時に山また山の林業しか産業がないような村の林業家に就職。はじめは住み慣れた都会に帰りたい一心でしたが、ここで良き経営者や先輩の林業従事者に囲まれ、次第に林業への関心を高めていくというストーリーが先輩や村人との心の交流を通じて展開されます。

なぜ林業を小説のフィールドに取り上げられたのですかーという質問に対して、三浦さんは「私の祖父は三重県で林業をやっていたんです。しかし既にその頃でも林業は斜陽産業といわれ、私の父も大学へ入ったときから郷里を出てしまい、結局、祖父のあとは誰も継がず、林家としては途絶えてしまいました。しかし、私が幼い頃に遊びに行った郷里は、植林されている山の緑がすごくきれいだったし、水もすごくきれいだっただけです。祖父は会社勤めではないし、ブラブラしているんですが、とても楽しそうだし、細かいことを気にしないような人でした。そういう祖父への憧れや、また、私自身も祖父がやっていた林業の仕事って何なんだろうということがずっと気になっていました。そんな幼いときからの気持ち、林業を小説の題材に取り上げるきっかけとなったといえます」と説明します。

三浦さんはこのなかで郷里を「植林されている

緑のエッセー

作家 三浦しをん

三浦しをん

1976年東京生まれ。2000年書き下ろし長編小説『格闘する者に〇』でデビュー。2006年『まほろ駅前多田便利軒』で直木賞受賞。小説作品に『月魚』『私が語りはじめた彼は』『むかしのはなし』『風が強く吹いている』『きみはボラリス』『仏果を得ず』『光』など、エッセイ集に『三四郎はそれから門を出た』『あやつられ文楽鑑賞』『悶絶スパイラル』『ピロウな話で恐縮です日記』など多数。



山の緑がすごく綺麗で、水も綺麗」と表現しました。この点を確認すると、「もちろん広葉樹の森というのは綺麗だと思います。しかし、祖父が住んでいた村の山や、取材中に歩いた尾鷲や松坂で見た山は植林されていて、人工的といえば人工的なんです。手入れが行き届いた山ってすごく美しいですよ。本当に緑で、綺麗な列になって、それが重なり合っていて、なんともいえない複雑な色になっているんですね。そこに霧が沸いたりモヤがかかったりして、見ていると本当に飽きないんです」と、非常に細やかな情景描写を加えながら山の魅力を語っています。

三浦さんが伝えたい山の美しさが、読者に伝わらないケースもあるのではという質問に対しては、「小説は何を書いても通じないんですよ(笑)。絵だったり映像だったら、見れば何を写しているか、どんな風景かは分かる。しかしその場合も、香りや音はしないですよ。どんなメディアであっても、表現できることは、それぞれ限られると思います。あとは受け手の想像力に委ねるしかなくて、その想像力の波長が丁度合ったら、こちらの意図以上に伝わるかも知れない。けれど、まあたいていはそんなに伝わらないものです。自然の描写や、仕事の描写だけではなく、登場人物の気持ちとか行動とかも、こっちが一生懸命書いているのに伝わっていない、ということが結構あるんです。だけど、それぞれがどう受け止めるかで、同じ文章を読んでも、ぜんぜん違った風景が浮かび上がってくる。この広がり、小説のいいところだと思いますよ」と小説を書く喜びも披露していただきました。